

# 地域のお宝を探して

生活支援体制整備事業 前厚別区生活支援推進員 **中山 節子**さん

区内各地に熱心に足を運ぶこと約2年。中山節子さんは、これまで地域の支え合いをつくってきた過程で、たくさんの方と出会い、その出会いを「お宝」と呼びました。

常に「全力投球」で目の前の課題と向き合ってきた中山さんが、「出会い」や「つながり」をどのようにとらえてこれまで活動してきたのか、また、これからの地域福祉活動にどんな期待を寄せているかお話を伺いました。

なボランティア活動は、生活支援体制整備事業では一つの地域資源としてとらえます。しかし、福まちが担う相談機能や調整(つなぐ)機能と生活支援推進員の業務との違いを明確に示すことが難しく、悩むことも。

「お互いが把握する課題を共有して、地域で解決のしくみをつくるお手伝いをしたり、新たな社会資源を発掘するという生活支援推進員の役割を理解してもらうためには、関係を深めるための時間ももっと必要だなと感じることも少なくありませんでした。」と、少し心残りをのぞかせます。

それでも、信頼し合える関係は、一朝一夕でできるものではないということも身に染みて感じているため、焦ることはなかったといいます。

## バトンをつなぐ

ご家庭の事情により今年11月で退職された中山さん。「まだまだやりたいことはたくさんありますが、後は次の人たちに託します。」全力投球の人ならではの清々しい表情を見せてくれました。

中山さんは、生活支援推進員として厚別区で仕事をしてきてたくさんのお宝を見つけたそうです。「どこにあるかは、『あつべつふれあいMAP(注2)』に記してあります。その『お宝』とは『素敵なお宝』です。」

こうした出会いは、社会資源の原石です。それらは大切に育てることで、福祉課題解決に貢献する地域にとっての「お宝」にもなります。

中山さんがのこした宝の地図とも言える「あつべつふれあいMAP」を手に、皆さんもお宝のような出会いを探してみませんか。

優しい上司に恵まれてきました。」と振り返ります。前述のあつべつリハメンコ体操も「従来の介護予防体操より、もっと楽しくリズム感がある体操があったらいいな。じゃあ新しく作っちゃおう。」という発想から生まれたとのこと。

こうしてみると、中山さんが大切にしていることは、地域の福祉課題を支え合いで解決していくという生活支援体制整備事業のコーディネーターとして欠かせないものばかりです。始終謙虚な語り口でしたが、中山さんの言葉は、これから厚別区の福祉を担っていく全ての活動者に対する力強いエールにも聞こえました。

## 生活支援体制整備事業と福まち

「区内には6つの地区福祉のまち推進センター(以下「福まち」)があります。皆さんとても素敵なお宝ばかりで、いつも温かく仲間に入れてくれました。」ただ、生活支援推進員は、直接対象者を支援する手段を持っていないので、最初のうちは相談されることも少なく、地域の担い手との関係を深めるために時間がかかったといいます。

福まちが行う見守り活動や交流事業、日常生活上の簡単

## 仕事をするうえで大切にしてきたこと

お話を伺う中で浮かび上がってきたキーワードは「つながりを大切にすること」、「どんな時でも楽しく仕事に取り組むこと」、「チャレンジ精神を忘れないこと」の3つです。

### 「垣根を超えた連携が必要、それがなかなか難しい」

「専門職や地域の活動者の一人ひとりが持つ支える力はとても大きい。それらがつながっていくと、さらに何倍もの力を発揮します。」と中山さんはいいます。組織や考え方の垣根を超えて、お互いの想いや活動を理解し、尊重し合える関係を築くことで、つながりは機能します。

「お互いを理解することが大事と簡単に言うけど、それがなかなか難しい。」だからこそ中山さんは何度でも足を運んで、相手の想いやその背景にあるものをしっかりと聴くことを大切にしてきました。

### 「仕事は楽しく」でも全力投球で

「どうすればもっと楽しくできるかを考えることで、仕事ももっと好きになる。」中山さんがいつも笑顔でいられる理由です。ただ、やるからには常に「全力投球」。「手を抜くということは、性格的にできないのかもしれないね。」と笑います。

お話を聞いていてもバイタリティにあふれる中山さん。趣味の一つが登山というもうなずけます。たまに愛犬を連れて登ることもあるそうで、仕事にも生かされる軽快なフットワークは、趣味の登山で鍛えられてきたのかもしれない。

### 「思いついたらとちとち口に出してみる。」

「新しい取り組みにチャレンジするときは、すぐに上司に相談をします。『やってごらん』と後押しをしてくれる

「生まれは道東の別海町。元々は保育士でした。」4人の子どもの育てながら、約8年間、北見市の障がい児・者の支援施設に勤めていた中山節子さん(68歳)。「北見の施設がとても地域に根差した運営をしていたので、自然にそういう意識が身についたのでしょうか。」中山さんは、地域の人たちとのつながりを大事にしてきた人生を振り返ります。

1992年、ご主人の仕事の関係で札幌に移り住んでからは、介護福祉士の資格を取って高齢者に関わる仕事に転進。ショートステイや介護予防センターのスタッフとして、そして2年前からは生活支援推進員として、さまざまな立場で厚別区の福祉活動に関わってきました。

## たくさんの方の経験とステップアップ

「一つひとつの職場でステップアップさせていただいたと思っています。」たくさんの方と関わることで、そのつながりは仕事をする上での中山さんの強みとなってきました。

また、「職場が変わるタイミングでも、そのつながりに導かれて良い方へと進んでいった気がします。」とこれまでの職場を思い返しながら、感謝の想いを口にされました。

厚別区内の介護予防体操として定着しているあつべつリハメンコ体操(注1)は、介護予防センター厚別中央・青葉時代に中山さんが同僚の皆さんたちと共に作り上げたものです。この時もこれまで築いてきたネットワークが大きな力になりました。

### 【生活支援体制整備事業】

ひとり暮らし世帯や支援を必要とする高齢者が増加する中、地域組織やボランティア、老人クラブ、社会福祉法人、NPO、民間企業など地域の多様な主体が連携を図り、高齢者の生活支援「支え合いの仕組みづくり」を行います。